

やまびこ 特別号 368号



～図書館員の読書感想文～

アビゲイル・タッカー著 「猫はこうして世界を征服した」を読んで

我が家には、1匹ネコがいる。7歳のキジトラの雌。これが、まあ、かわいげが無い。暇で遊んで欲しい時、腹が減った時以外、近寄りもしない。

最悪なのは、午前4時ごろになると腹が空らしく、睡眠中の私の、主に手の指を攻撃してくるのである。それも鋭い爪を立てて。撃退しても、1分も経たずに再攻撃。この攻防が、私が諦めて餌を用意するまで続く。流血沙汰もしばしば。私が留守の時は、女房を攻撃するのだが、話を聞くと、頭突きをしてくるそう。くすぐったくて大変だとのこと…。

こんな理不尽な生物を、それでも、本当に不思議なことに、嫌いになれない。

理由を求めて読んで訳ではないが、この本には成程と思わされることが書いてある。

この本の要旨の一つは、ネコは、人間から好かれることに特化し、人間とともに世界に広がり、大繁殖している。ということで、理由として容姿が赤ちゃんに類似する点が多く、そのため、何の役にもたたくても、人間から愛されてしまうという。例を挙げると、顔の目鼻口の配置、大きい目、小さい鼻、鳴き声(対人用とその他用があるらしい)等々、これを武器に、人間の生活空間に入り込み、世界中にちらばり、持ち前の繁殖力と狩りに特化した身体能力で、既存の生態系を破壊しまくっているとのこと。

また、世界が都市化するにつれ、ライバルのイヌが大きさや飼育面で敬遠されている昨今、実生活から電脳空間にまでネコが溢れている状況であるという。確かに、ネットを開くと、写真・ブログ・ミーム等、ネコにお目にかからない日はない。

さらに、飼い猫は「ニャー」や「ゴロゴロ」など、人間が心地よく感じる鳴き声を出すことで、積極的に飼い主を自分好みに教育?しているという。たしかに、飼い主あるあると思うが、ネコをなでていると、これ以上やったら噛まれるという閾値が、痛い経験を通じて判断できるようになる。まさに教育の賜物か。

これではまるで、人間に寄生して支配するエイリアンのようであるが、それを喜んで受け入れてしまうのが、ネコ好きのどうしようもないところである。



＝この本、「猫はこうして世界を征服した」が
気になる方におすすめの本＝

- 『ネコ・かわいい殺し屋』ピーター・P・マラ(2019)
- 『猫の気まぐれには理由がある』橋本 うね(2016)
- 『猫を処方いたします。』シリーズ 石田 祥
- 『ねこのシジミ』和田 誠(1996)
- 『図鑑NYAOネコみつけ!』
佐藤 克之/文・たなかひじもと/作画(2023)
- 『一緒にいたい!羊毛フェルトのちび猫づくり』Hinali (2022)
- 『いちばんよくわかる猫種図鑑』長谷川 諒(2022)
- 『おだんごどん リベンジ』ガタロー☆マン(2024)

令和7年10月1日発行
 鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館
 〒997-0036
 鶴岡市家中新町14-7
 (図) TEL: 25-2525 (郷) TEL: 25-5014
 FAX: 25-2526



10月の新着図書



リクエスト・予約開始は 10月10日(金) です

◎小説・エッセイ

- アザミ (綾木 朱美)
- イン・ザ・メガチャーチ (朝井 リョウ)
- どら蔵 (朝井 まかて)
- おまえレベルの話はしてない (芦沢 央)
- ブラックスワン (相場 英雄)
- 名探偵円朝 (愛川 晶)
- エレガンス (石川 智健)
- 七人の記者 (一本木 透)
- 追憶の鑑定人 (岩井 圭也)
- おにたろかっぱ (戌井 昭人)
- イクサガミ 神 (今村 翔吾)
- アンダーザスキン (宇野 碧)
- 冷蔵庫探偵蔵前怜子 (遠藤 彩見)
- 普天を我が手に 第2部 (奥田 英朗)
- 本好きの下剋上ハンネローレの貴族院5年生2 (香月 美夜)
- 蜻蛉の夏 (垣根 涼介)
- 森羅記 1 (北方 謙三)
- 戦国小町苦勞譚17・18(夾竹桃)
- 職分 (今野 敏)
- じゃないほうの歌いかた (佐々木 愛)
- 失われた貌 (櫻田 智也)
- 佐伯警部の推理 (佐々木 譲)
- 残月無想斬り (佐伯 泰英)
- 読むと死ぬ本 (彩藤 アザミ)
- モンテスキューノート (首藤 瓜於)
- 英雄の輪 (真藤 順文)
- マッドのイカれた青春 (実石 沙枝子)
- ブレイクダウン (砂川 文次)

◎実用書

- AIの基本(栗原 聡)
- クラウドのきほんとしくみ (大澤 文孝)
- エモさと報道 (西田 亮介)
- STOIC (ブリタニー・ポラット)
- 音楽療法の道しるべ(佐治 順子)
- 運とコネのつかみ方(内田 博史)
- 47都道府県・合戦百科 (小和田 泰経)
- ヤバい保険の経済学 (リラン・エイナヴ)
- マンガで解決老人ホームは親不孝? (上大岡 トメ)
- きものの不思議 (長崎 巖)
- 作ってビックリ! 科学工作 (ささぼう)
- がんばらない透析食(井上 啓子)
- 「尿もれ・頻尿」を自力で改善! スゴ技100 (関口 由紀)
- おいしい循環 (たいら 由以子)
- 原爆誕生 (鈴木 冬悠人)
- 最新日本酒の科学 (和田 美代子)
- おうちにある100の幸せ (toka)
- 日本老舗食堂大全 (相川 知輝)
- がんばらないずぼら菓子 (土屋 タダヒロ)
- 毎日食べたい! バナナのレシピ (BANANAFACORY)
- まいにち食べたい! 生姜レシピ (森島 土紀子)
- 図解紙片づけ (石阪 京子)
- 米の日本史 (土肥 鑑高)
- 独断と偏見 (二宮 和也)
- 最高の二番手 (堺 正章)
- 絶賛語辞典 (関根 健一)

◎児童書

- 人と人とのにんまりする話 (小澤 俊夫)
- 妖怪大探検! (香川 雅信)
- 石のひみつ図鑑 (柴山 元彦)
- 一年一組せんせいあのね 2 (鹿島 和夫)
- 暗黒の王子・大形京(石崎洋司)
- おぼあのサーターアンダギー (上條 さなえ)
- どろぼう猫とキメキのリボン (小手鞠 るい)
- 千年先のあなたへ(佐藤まどか)
- 異世界フルコース (廣嶋 玲子)
- 山の神の使い (最上 一平)
- イタチと野ネズミのはなし (山下 雅洋)
- アイとムリ (デイヴ・エガーズ)
- ◎絵本
- おにぎりのなかにおにがいる (あわい)
- ひぐま (あべ 弘士)
- ぼくはかける (イ ハジン)
- そらのさんぼ (石津 ちひろ)
- たねちゃん (乾 栄里子)
- おうさまのみみは口バのみみ (いもと ようこ)
- くまくんこぐまくんのおいもほり (乾 栄里子)
- オオカミのひみつのひみつ (内田 麟太郎)
- のこったのこった(おおなり修司)
- わたしのかみのけのばしたら? (おおの こうへい)
- ありがとうのもり (かねこ まき)
- スウスウとチャップン (くどう れいん)
- あめあめふれふれ (くすのき しげのり)
- ぜったいにたべちゃダメ? (ビル・コッター)
- 中生代水族館 (こた)

やまびこ号の次回巡回日は

月 日です

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。新刊は、ホームページでもご覧いただけます。



種田山頭火から和田光利、そして丸谷オ一へ

7月29日から開催していた「生誕百年記念 丸谷オ一展」も9月28日を以て閉幕した。展示期間中、多くの方々より足をお運びいただきまして、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、今回の展示で紹介した資料の中に「Aとの対話」という一文がある。これは昭和21年11月に発行された「白鷺社回覧雑誌」の中に収められたもので、丸谷氏自身かと想起される「僕」が新潟の旧制高校から帰省した際、「A」という鶴岡在住の友人と文化芸術について語り合うという趣向の文章であるが、この中で「A」は「鶴岡文化人類学」という鶴岡の文化人の類型を考えている。それによれば、鶴岡には「児玉充弘型」「三井光弥型」「和田光利型」があるとのこと。以下、大まかに分類すると、児玉充弘は随筆家として有名だが、その一方で文芸サークル「らくがき倶楽部」を創設したり、白鷺社の事務局を務めるなど、広い視野で鶴岡の文化芸術に目配せをしていた人物という印象を持つ。総合型とでも言えようか。次の三井光弥は森鷗外とも交流のあったドイツ文学者であり、鶴岡に居ながらにして『独逸文学十二講』をはじめ、ドイツ文学に関する多数の著作を残した。いわば、孤高の研究者型といえよう。3人目の和田光利（あきとし。「秋兔死」とも表記した）は幕末期に菅実秀らと共に庄内士族を牽引した和田助弥の子孫である。ただし、光利の父の代で没落してしまい、その後待っていた苦労の日々の中で、和田は定型に囚われない自由律の俳句に出会い、それに没入する。型にはまらないということから、奔放型なのかもしれない。

ところで、あまり知られていないことだが、丸谷氏は高校時代に美術部に属し、白鷺社展にも出品していた。想像するに、当時の白鷺社はサロンのような雰囲気があり、何かの会合があると、いわゆる文化人たちが集まり、そこに若き日の丸谷氏も参加していたのではないかと。そして、そこで得た体験から文化人を分析して類型化することができるほど、実は当時の鶴岡の文化状況に精通していたのではないかと。今まで誰も唱えたことのない説が浮かんでくる。

例えば、丸谷氏は本誌の巻末に「読後感」を執筆しているが、この中に「読後感を記すのは大人気ない」とも考へられたのか、誰一人、いや和田老（怒り給ふな、和田老よ）を除いては誰も書いて居られぬ」として、和田光利を揶揄するような一節がある。このような親しげな口調から、当時、丸谷氏と和田は面識があったと推察するわけだが、和田といえば、この文章からちょうど10年前の昭和11年（1936）6月、同じく自由律の俳人で当時全国を放浪していた種田山頭火を自宅に招いたことで知られている。

昭和24年（1972）3月4日の「庄内日報」に和田が寄稿した「鶴岡に出現した放浪俳人 種田山頭火」という一文には、その出会いの場面を「私は下駄をつっかけたが、或いはハダシだったか—また山頭火と叫んだが迅いか—彼もまた光利と絶叫しました。双方の頬に泪らしいものが光りました」と綴っている。さらに、昭和63年（1985）12月11日に掲載された「朝日新聞」に掲載の特集記事「種田山頭火『秋兔死君に』」では、邂逅した50年前のことを「いまだに感動が走るのか、抱擁シーンについて、二度も繰り返ししゃべった」と記されている。そうであればなおさら、丸谷氏と和田が出会った昭和20年前後は和田の山頭火の思い出も鮮明であり、熱を帯びて丸谷氏に鶴岡で共に過ごした日々を語ったことは想像に難くない。ちなみに、『山頭火全集第七巻』（春陽堂 1987）に所収された、この時の日記によれば、山頭火が鶴岡に滞在したのは6月13日から22日までとなり、その間、支払いは全て和田に任せ、湯田川温泉や新茶屋で酒浸りの日々を過ごしていた。その後、和田には何も告げず、山頭火は23日に仙台に向かったという。

さて、この和田と山頭火の出会いから導かれるのは、昭和49年（1974）7月に『群像』で発表された「横しぐれ」という作品である。この小説では、大学で国文学の教員である主人公の父とその友人の黒川先生が昭和14、5年頃に松山の茶屋で酒を奢らされた坊主は、実は山頭火ではないか、と推察し、それを証明するために、さまざまな文献を突き合わせ、当該人物が山頭火であったことを証明していく過程が描かれている。このような話の流れから、丸谷氏には山頭火という人物について、和田光利に聞かされたイメージがあり、さらに趣向を凝らし、「横しぐれ」という言葉をキーワードにして、本作を創作したのではないかと想像するわけである。

管見の限り、丸谷氏が和田光利から山頭火について話を聞いたという記述は読んだことはない。それ故に、これまで両者の接点について、言及されたことがなかったため、「横しぐれ」に登場する山頭火を鶴岡に来ていた山頭火と結びつけて考えることはなかった。今回の展示で、丸谷氏と和田光利との交流が見えたことで、もしかしたら、この作品の契機は鶴岡にあったのではないかと想像も、あながち的外れとは言えないのではないかと秘かに自負した次第だが、こういった結論の導き方は、案外丸谷氏のエッセイに見られたりするような気もする。

なお、「横しぐれ」という作品は、その後翻訳されて、平成3年（1991）6月にイギリスの新聞「インディペンデント」の外国語特別賞を受けている。若き日に研究を志した英文学の本場でも評価されたこの作品を、丸谷氏の代表作として、この機会に是非お勧めしたい。
(今野 章)

つちだよしはる 絵本原画展

展示期間：令和7年 10月21日(火)～11月3日(月・祝)



鶴岡出身の絵本作家つちだ先生の、最新作を含む4作品の原画が図書館2階に大集合！！

原画ならではの筆の跡や、素敵な色使い…ぜひ近くでじっくりご覧ください！

なんと今年は期間中の10月25・26日に、サイン会も行われます！

(サインの対象は会場特設ショップで購入いただいた書籍のみです。)

詳細は館内に設置のチラシ、または左側の二次元コードから接続できるホームページでご確認ください。たくさんのご来場をお待ちしております！

